

- ・最高の山と最高の謎
- ・普通ではない企業
- ・名文の100年
- ・不眠症高校生を
描く青春漫画!!

最高の山と最高の謎に魅入られる

「第三の極地」とは北極・南極の初到達にことごとく失敗したイギリスが、世界最高峰エヴェレストを「サード・ポール」と見立て、初登頂に国の威信をかけて邁進したことに由来する。一九二一年の遠征で登頂ルートにあたりをつけ、翌二二年登山史上初の酸素補給器を使用し、当時の最高到達点八三二一メートルを記録するも、最後の頂上アタック時に発生した雪崩により、登頂はおろかポーター七名を失う。隊のエース登山家ジョージ・マロリーが残したあまりにも有名な「なぜエヴェレストに登るのか?」「そこにそれがあから」のやりとりはこの大惨事直後のアメリカ講演旅行でのことである。

この失敗から登頂にはベテランより若い力が必要と判断。マロリーも三七歳になっており、アタックのパートナーに二一歳の新鋭サンディ・アーヴィン起用。そして運命の二四年六月八日を迎える。

最後に目撃されたのは八六〇〇メートル付近。「小雪稜上に小さな黒い点が浮き出し、第一の黒点は、大きな岩の段差に接近しており、ほどなくそ

の天辺に現れた。もう一つの点も同じような塩梅だった。まもなく、その魅惑的な光景はかき消され、再び雲に包まれた。

彼らは登頂に成功したのか? 携帯していたカメラには何が映っているのか? この百年来の謎は多くの人を魅了する。書店がらみで言えば、夢枕獏が小説『神々の山嶺』を書き、谷口ジローが漫画化し、映画にもなった。さらに谷口のコミック版がフランスでアニメ化されたことも記憶に新しい。

もちろん登山界はずっとこの謎を追ってきた。三三年アーヴィンのピッケルが、九九年にはなんとマロリーの遺体が発見され、その写真がネットに拡散するや、空前の狂乱が巻き起こる。では、アーヴィンは? カメラは何処だ? 一攫千金が現実味を帯び始める。

エレスト登山旅行が大流行。九六年にはガイド二名登山家六名の死者を出す大事故が発生。偶然そのツアーに居合わせたジョン・クラカワの『空へ』や同事故を描いた映画『エベレスト3D』を見れば、その墮落ぶりが掴める。

そんなマークが二〇一七年に友人であり九九年のマロリー/アーヴィン調査隊に加わり実際にマロリーの遺体も検めた経験を持つトム・ポラードから、アーヴィンとカメラを捜索する遠征をまだ諦めていないと告げられるところから本書の幕は開く。アーヴィンの遺体の正確な場所を知るとい人物がいるというのだ。エヴェレストに複雑な感情を持つマークだが、次第に深く魅入られていく……

どうです、面白そうでしょう。最高の山と最高の謎。ページを繰る手が止まりませんぞ。



George Mallory

装幀デザインの革新者

菊地信義のライフワーク

菊地信義氏は一万数千点もの本の装幀を手掛けた装幀家であり、昨年三月二十八日に七十八歳で逝去されました。菊地信義氏は講談社文芸文庫が創刊された一九八八年の当初から基本設計と昨年五月発売の高橋たか子『亡命文字通りのライフワークでした。『装幀百花 菊地信義のデザイン』は菊地信義氏が手掛けた講談社文芸文庫での装幀を五つの観点から分類し、色刷のページで紹介しています。解説は菊地信義氏の弟子であり、今年二月より講談社文芸文庫の装幀を引き継ぐことになった水戸部功氏です。

巻末の水戸部功氏の解説にも記載されていますが、本来文庫は安価で合理的にテキストを保全するものですが、講談社文芸文庫は違う方向に振り切りました。安価であることを捨て、特殊インキを用いた印刷をし、タイトル文字を箔押しすることで格調高い装幀としました。その結果、文庫でありながら高価という矛盾を抱えた商品が生まれたのです。本書は色刷ページも含まれるので通常の講談社文芸文庫より更に高価です。また、写真やイラストを使用せず、あくまでも文字と余白で勝負するデザインを三十四年間も継続されてきたのは驚異的です。

講談社文芸文庫を持っておられる方は、是非本書もチェックして頂き、菊地信義氏のライフワークに触れてみて下さい。

偶然のアート作品

鉱物は古来より人を魅了し、装身具として身に着けるものもあれば、歴史的遺物となって美術館に保管されているものもあります。その中で宝石は、私の身近にはない高価なものの代表です。実際に持つことはなくとも図鑑で見るとは興味深いのです。

不純物として扱われるものも見方を変えればまるで植物、深海、雪景色などを閉じ込めたような地球の風景として見ることで面白いです。鉱物は長い年月をかけて地球上にできたもの、インクルージョンはその中で偶然できたものであり、それを目にできるのもまた偶然かと思う不思議です。

その鉱物の希少性も記載されているので購入する時の参考にもなります。本当に美しい芸術作品のような鉱物が楽しめる写真集です。

そんなわけで、『美しいインクルージョンの鉱物図鑑』の美しくも何か不思議な模様にも見える表紙が目にとまりました。インクルージョンとは鉱物の結晶内部に取り込まれた異種物質など

普通を極めた故に 普通ではない企業

「キーエンス」という会社をご存じだろうか。業務用のセンサを中心とした電子機器を製造販売している会社である。「三十代で家が建ち、四十代で墓が建つ」と表現される給料の高さや、分単位の日報を記入する営業職の過酷さは良く耳にする企業だが、実際の詳しいところはあまりニュースや記事では目にしない印象である。今回、その内部に迫った日経記者がまとめた本がこの『キーエンス解剖 最強企業のメカニズム』である。印象的だったのは、著者が取材を終えた後に言われた「あまりに普通で取材しがいがないでしょう」というあるOBの言葉だ。著者も書いているとおり、「外回り後の日報」「営業のためのロープレ訓練」など、他企業でも普通に実施されているようなものが多く特別感はない。ただ、その実施レベルが非常に徹底されていて、意識も精度も普通でなく「高い」。それを「あまりに普通」と表現できる体制がこの会社の強みのだろう。

以前キーエンスの営業と交渉をしたことがある知人から「とにかくすごかった」と語彙力が失われた感想を聞いたことがあったが、この本の内容が正しく表現されているのであれば、自分でも同じ反応になりかねない。「当たり前のことを当たり前にやる」だけではなく、それをいかに徹底できるかが大きな差を生む重要な要素なのだと思身沁みて感じた。

一生ものの一冊

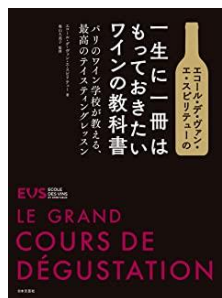
ワインの初心者から中級者向けの本は良く目にしますが、これほどの厚みのもはなかなかお目にかかりません。『エコール・デ・ヴァン・エスピリテューの一生に一冊はもっておきたいワインの教科書』は、パリのワイン学校が教える、まさに本場の教科書です。

とは言え、神の舌を持つ人向けのような、敷居が高い本では決してなく、ワインに関する基本を、じっくりと学んでいくことができます。一方で、明日から使えるワインの知識を覚えることや、即興で使える蘊蓄語を得たいという読み物としての目的には不向きです。ワインへの知識と理解について長い年月をかけてゆっくりと熟成

し、お酒との付き合い方を深めたいという方向けの書籍です。

本書に写真や実物の画像は登場しませんが、ほどよくカラフルな地図やユニバーサルデザインイラストが、良い意味で現代の教科書的で、非常に洗練されています。永久保存版として幅広い人に読んでほしいという編集者の思いを感じます。

ワインに興味があり、農産物や人体の科学、理科、歴史、世界地理など、幅広く「教養」に興味がある人に大変おすすめです。本棚に置いておき、たまに読み返す、そんな大人のコレクションに相応しい一冊です。



新しい視点で学ぶ 美術図鑑

お子様に大人気の小学館の図鑑NEOシリーズの最新刊は「そうきたか！」と思わず唸るアート図鑑である。その名も『小学館の図鑑NEOアート 図解 はじめての絵画』。本書の何がすごいのかというと、ただ世界の名画を年代順で紹介するのではなく、「ヒーローの描き方」や「瞳の輝かせ方」など、自由な発想のテーマで各絵画を比較したり、絵を観に行くだけではない美術館の楽しみ方を教えてくれたりと、子どもの興味を引き出す工夫が随所に散りばめられているところである。大人にとっても驚きや発見の連続で、美術鑑賞の入門書として最適な一冊だ。

時代にとらわれない絵画の楽しみ方を知ったところで、より深く美術を学びたいという方には『世界アート鑑賞図鑑 改訂版』をおすすめしたい。二〇一五年に発売し、長らく入手困難であった書籍が今年二月に改訂版として刊行された。こちらはNEO図鑑とは違い紀元前から現代アートまでを年代順に紹介する作りとなっており、学術的に

濃厚な

超現実世界へようこそ

シュルレアリスムの作品を前にすると、どれだけ自分の脳みそを拡張できるか試されている気持ちになります。みなさんのお気に入りのシュルレアリストは誰ですか。私はレオノーラ・キャリントンとヤン・シュヴァンクマイエルが好きです。詩人を思い浮かべた方はおられますか。私は絵や映像は見ますが、詩はほとんど読みません。ブルトン、ランボー、エリュアール、読んでみたいとは思いつつ、何を読めばいいのか、どう楽しめばいいのかかわからず、名前だけ知っている状態です。

『シュルレアリスムへの旅』はシュルレアリスムの父、ブルトンから順に、詩人を巡ります。一つの章は一〇ページ程度。詩の引用と詩人のエピソードがあります。時々登場する、原文フランス語の韻の解説が楽しいです。言葉による、視覚を通さないコラージュ。読み進めるにつれて、脳の神経が繋ぎ変えられていくような感覚がしました。

本書には、昨年富山県でも開催された「ミロ展—日本を夢みて—」についての記述もあります。そして、瀧口修造の詩も引用されています。

詩を読まない方も、詳しい方も、未知の魅力を発見できると思います。ぜひ楽しんでみてください。



Andre Breton

詩

名文の二〇〇年

創刊一〇〇年余りであった『週刊朝日』が休刊になる報を聞いて、雑誌好きの私は寂しい気持ちになる。扇谷正造編集長時代に百五十万部を誇った雑誌も終焉を迎えることになるろうとは。

総合誌の雄『文藝春秋』も創刊一〇〇年。一〇〇周年企画として、連載されている「菊池寛アンド・カンパニー」がすこぶる読ませる。最新の三月号ではちようど文藝春秋を創刊した時期を描く。

創刊号より続く名物企画が「巻頭随筆」である。同三月号には元「週刊朝日」編集長・森下佳枝さんが『週刊朝日』休刊に寄せて」と寄稿しているように、立場を超えてあらゆる文筆家たちの名文が掲載される。『文藝春秋』最大の存在意義は「巻頭随筆」と「社中日記」にあると思っている私にとって、ここに目を通すということとは、食べる・寝ると変わらない日常風景だ。

『巻頭随筆 百年の百選』は大正・昭和・平成・令和の四つの時代にわたって、錚々たる文筆家たちが寄稿した七〇〇〇を超える随筆より一〇〇篇を選ぶ。昭和に吉行あぐりが書けば、平成には娘の和子が書く。掲載時期は当然違うが、それぞれの随筆を読むと、計ったかのように、親子の応答になっ

手紙が教えてくれる巨匠の姿

レナード・バーンスタイン二十世紀アメリカを代表する指揮者。ピアニストとしても活躍し、ミュージカル「ウエスト・サイド・ストーリー」などの作曲家としても知られている。そんな世界的マエストロである彼と深い交流をしていた日本人がいたことを『親愛なるレニー』を読んだことが

アメリカ文化史を研究する著者が米議会図書館で閲覧したレナード・バーンスタイン・コレクション。その中に見つけた二人の日本人からの手紙。ひとり天野和子。まだ駆け出しの音楽家だったレニーが書いたエッセイに感銘を受け、おそらく日本で初めて

なっているのだからおもしろい。

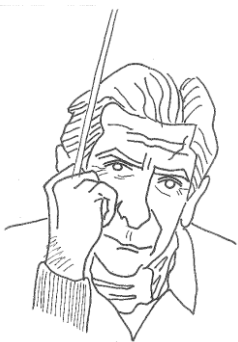
「巻頭随筆」で忘れてはならないのが、必ず連載随筆があるということだ。『文藝春秋』創刊時の連載は菊池寛の親友であった芥川龍之介の「侏儒の言葉」。司馬遼太郎「この国のかたち」、阿川弘之「蔑の髓から」、現在の藤原正彦「古風堂々」に至るまで、各連載の第一回が本書には掲載されている。その知名度たるや凄まじい。我が家の本棚に、各連載が収められた書籍が並んでいるのはそういう理由だったのか。

本当は何も語る必要はなかった。「名文は、時を越えていく」。これがすべてだ。 熊

彼にファンレターを出した少女。現在の感覚では返事が来るだけでも驚きだが、二人の交流は彼が世界的スターとなり、彼女が母となった後も続いた。先に妻を亡くしていたレニーを思い、自身の夫の病を黙っていた彼女に見せたマエストロの姿には、二人の深い友情を感じさせられた。

もう一人は橋本邦彦。マエストロと恋に落ち、十年以上にわたって三五五通もの手紙を出していた青年。正直、あまりにも情熱的、かつプライベートな内容なので、他人が読んでしまっても良いのだろうか、と躊躇う気持ちもあつた。やはり、本来邦彦の書簡は、

電子メールでのやりとりが当たり前になった現代では、今後こういった書簡集が世に残ることはあるのだろうか。手書きの手紙は趣があると同時に、思いが伝わるまでのもどかしさや、返事を待つことの「重み」を伝えてくれる。妙なLINEのスクショばかり出回る世の中では味気ないのだ。



Leonard Bernstein 都

その物差しでは測れぬモノ

「重たい」事件、と聞いて、どのような事件を想像するだろうか？被害者の多さ、金額的損失の大きさ、メディアでの取り上げ方など様々な指標があるだろうが、私たちの心に響く「重さ」は、やはり社会的な問題に根差しているか否かでないだろうか。その点において、ニュースで聞く機会が

学歴で人を見ること自体には、一定のメリットや確実性もあり、全部が全部否定する気はない。しかしながら、なぜ学歴という物差しで測る必要があつたのかを忘却し、数値や肩書だけにこだわった結果、発生したのがこの事件である。母親も娘も生まれながらの異常者ではないし、初めから異常な環境であつたわけでもない。すなわち、私も読者の皆様も、本件のような事件の被害者、容疑者になりうる可能性は十分にある。一般家庭が狂気に飲まれていく過程、根本の原因とはなにか、事件を思いとどまるポイント、普通の家族に戻るポイントはなかつたのかなど、本書を読み進める意義は大きい。

本件が提起する社会問題とは、「学歴信仰」である。母親は、娘の学歴に病的に拘った。結果として、容疑者は医学部を九浪し（その間、志望学部の変更などは許されず）、度を超えた「罰」と「束縛」が行われた。また、本書には母親から送られたLINEの本音が掲載されている。あまりに辛辣で家族にあてたとは思えない、いや、家族にあてたからこそ容赦のなさが痛々しい。一連の流れと文章には、何かに執着した人間の狂気があふれ出ており、フィクションとは違う生々しさが感じられる。

学歴で人を見ること自体には、一定のメリットや確実性もあり、全部が全部否定する気はない。しかしながら、なぜ学歴という物差しで測る必要があつたのかを忘却し、数値や肩書だけにこだわった結果、発生したのがこの事件である。母親も娘も生まれながらの異常者ではないし、初めから異常な環境であつたわけでもない。すなわち、私も読者の皆様も、本件のような事件の被害者、容疑者になりうる可能性は十分にある。一般家庭が狂気に飲まれていく過程、根本の原因とはなにか、事件を思いとどまるポイント、普通の家族に戻るポイント



母という呪縛 娘という牢獄

世の中は

事象の連続でしかない

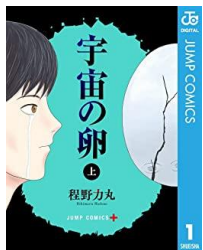
少年ジャンププラスで連載された『宇宙の卵』は程野力丸氏のデビュー作とのこと。夢のあるタイトルとはうらはらに、帯には「黒い物質に覆われた世界」とあるように禍々しいストーリー展開になっています。

一方世界は黒い物質に覆われ、生き残れた人の一部はある危険な能力に目覚めるのですが、外見ではそれが判断できません。危険を回避するためゴー

グルをつける人々はさながら現状のマスク姿のようです。

絶望の淵に立つルイを助けてくれるとある集団のリーダー、アンヘル。彼がいなければこの混沌とした世界はどうなっていたのだろうと考えるとゾツとします。

卵とはいったい何だったのか。読んだ後からジワジワ心に残ります。上下巻で完結するのは実にもったいないと思った作品です。



不眠症高校生を描く青春漫画!!

誰も眠れなくてつらいという経験があるのではないでしょうか？今回紹介するコミックは、「インソムニア(不眠症)」がキーワード。ビッグコミックススピリッツにて連載中の『君は放課後インソムニア』は、石川県七尾市の高校を舞台に不眠症に悩む男女の青春が描かれます。

今は物置になっている高校の天文台で、伊咲と丸太が偶然出会ったことから二人の交流が始まります。眠れないことを周りには相談できず、思い悩んでいた彼らにとって秘密を共有できる仲間に出会えたことは大きな出来事でした。

感、誰かに見つかったてはいけないという二人のドキドキ感が読んでいて伝わってくる魅力的なシーンです。

四月からはアニメ化、六月には実写映画化が決まっている今作。前々回紹介の『スキップとローファー』(著者は射水市出身)も四月からアニメが始まり喜ばしい限り。普段漫画は読まない、アニメも観ないという方にもこの機会にぜひ触れてもらいたい作品です。



カケオくん

33 本の雑誌を創刊し、書評家としても功績を残された目黒孝二が死去された。

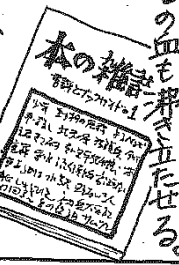


勤めていると本が読めないからと様々な会社を三日でやめるエピソードや、たとえ読めなくても新刊の背表紙を眺めるだけで幸せという感性はカケオさんの精神形成に多大な影響を及ぼしているのは間違いない。

『黒と誠』本の雑誌を創った男たち』はのちに『モセイスト』小説家映画監督として八面六臂の活躍をする椎名誠と目黒の出会いは始まり



『本の雑誌』の黎明期を熱く描いたマンガだ。



【編集後記】中田図書新聞は今回で七十号を迎えました。便利に持ち運べるものが良しとされている時代ですが、たとえ重くても！場所をとっても！トップ記事の登山家ジョージ・マロリーの言葉を借りるならば、「そこにそれ(本)があるから」買わずにはいられないという皆様のためのセレクトをこれからも続けます。

ダメな事ほど、したくなる。

「しちゃダメ！」なんて言われたら、逆に気になって仕方ない。もうそれは、人間の性分ではないだろうか。「パンどろぼう」シリーズで人気の柴田ケイコの新作『かぼちゃスープのおふる』は、ユーモアたっぷりにそんな人間らしさを描いている。

いつもと違う森の中を通って帰る事にした、くまさんとアルパカさんとねこさん。途中、「ご自由にお入り下さい。ただし、中のスープは絶対に飲まないように」と書いてある、かぼちゃスープのおふるを見つけて、いい匂いにつられて中に入ってみることに。

読者の想像通りに、スープを飲んでしまった三匹。その後もシチュエーション・ホットミルクのおふるを見つけてしまう。「誰も見てないし」「ちょっとくらいなら」言い訳を繰り返して、注意事項を破ってしまう様子は我が身を顧みて、ギクツとしてしまう。禁止されると余計にしたくなってしまうし、その事で頭がいっぱいになる。しかもダメな事を繰り返してしまえば、懲りない。

気持ち分かるなと思ったら最後、三匹とも愛おしい気持ちでいっぱいになり、きつと共感しているのは自分だけじゃないだろうと、ダメな自分の仲間を探してしまうのだ。

【書誌情報】『黒と誠』本の雑誌を創った男たち 1 (カミムラ晋作/双葉社) 一三二〇円 ※価格は本体価格です。